芝草伝本の一考察

――大阪天満宮蔵『連歌芝草』『芝草抄』の紹介と『芝草抄』翻刻――

伊藤伸江

一

本能寺本『芝草句内岩橋』は、上下二冊、下巻末尾に文明二年七月の奥書を持つ、心敬の連歌と和歌とを集成した書である。[1] 本能寺本は、上巻に連歌、下巻に和歌を持つが、上巻内の、心敬の発句と付句をおさめた部分は、はやくから単独に流布していたようであって、本能寺本と時期の近い古写本、文明十一年写本（『芝草』）と明応十年写本（『心敬詠草芝草抜書』[2]）にも、和歌の部は含まれていない。例えば、明応十年写本には、冒頭の歌集関連文言の内に「本之端作ニ／芝草内愚詠下　前後不同／哥数百七十七首　自注有」と記され、この写本の親本の段階では、和歌の集も併せて存したことがわかる。しかし、同写本では、巻頭と巻軸の和歌は記されるものの、和歌全体に関しては「畧之」とされている。和歌部分が脱落する傾向は、他伝本である中京大学本、書陵部本においても存した。心敬の作品は、明らかに和歌より連歌が需要も多く、伝来も多かったと思われる。

この論では、本能寺本をもとに、『芝草句内岩橋上』の現存主要伝本である文明十一年写本、明応十年写本、中京大学本、書陵部本、大阪天満宮本をあらあら概観する。さらに、このうち、大阪天満宮本を構成する『連歌芝草 全』及

び『芝草抄　増補』に関して紹介をし、『芝草抄　増補』の翻刻をなすものである。

二

まず、『芝草句内岩橋上』の主な伝本間の形式上の相違を示す。各伝本の形式はアルファベットで、伝本の持つ特徴は算用数字で列挙し、同一の特徴は同一の数字で示している。句番号はすべて『連歌大観一』所収の本能寺本の番号を使用する。また、付合は「前句の句番号／付句の句番号」で示すこととし、付合の本文も番号同様、断らない限り本能寺本で表すことにする。発句も、断らない限り本能寺本の本文で表す。ただし、本能寺本にない句は、句番号を記さず、句本文はその伝本での表現に従う。

本能寺本は上下二冊本で、その構成は次のように整理して表せる。

本能寺本『芝草句内岩橋』

上巻

A序

B発句及び自注　計九十一句

C付句及び自注（計二百六十二句、百三十一の付合）

①148／149の自注及び150／151の句を写しもらし、C末尾に補っている

下巻

D和歌及び自注（「芝草内愚詠下　前後不同」）計百七十九首

E跋

F文明二年興俊宛心敬奥書

この構成をもとに、他本を見ると、文明十一年古写本、明応十年古写本、中京大学本、書陵部本は、次のようになる。

『芝草』（文明十一年写本）

A序

B発句及び自注（「愚句芝草内発句」）計九十句

②37句「朝すゝみ水の衣かる木かけかな」がない

③配列が9、8の順となる

④配列が45、46、47、49、48、50となる

C付句及び自注（計二百六十二句、百三十一の付合）

⑤98／99なし

⑥110／111なし

⑦188／189の次に「214都をすてし山もすみうし／215思ひやれ横川の嶺の秋の暮」が入り、190／191に続く

⑧202／203の次に「はてはまよはん雲にいるとり／聞なれし人もいなはをかりあけて」（文明本本文）が入り、204／205に続く

⑨252／253の後に「246うつゝとも夢ともしらす立別／247袖になかけそ大淀のなみ」が入り、254／255に続く

⑩310／311の次に「あらましに胸のとを山思ひやれ／雪野のをしかあすやからまし」（文明本本文）が入り、312／313に続く

⑪末尾の二つの付合の順序が逆（352／353、350／351の順になる）

F文明二年興俊宛心敬奥書、「文明十一年暮秋日」の記載

『心敬詠草芝草抜書』（明応十年写本）

冒頭　歌集関連文言

A序

B発句及び自注（「愚句芝草内発句」）計九十句

⑫78句「秋の葉は雪気の雲をなこり哉」がない

⑬配列が45、47、46、48、49、50となる

⑭配列が75、77、76、79、80、81となる

⑮配列が87、89、88、90となる。

C付句及び自注（計二百六十句、百三十の付合）

⑯108／109、110／111、112／113の三つの付合がない（106／107の次は114／115である）

⑨252／253の後に「246うつゝとも夢ともしらす立別／247袖になかけそ大淀のなみ」が入り、254／255に続く

⑩310／311の後に「有増に胸遠山を思やり／高野のをしかあすやからまし」（明応本本文）が入り、312／313と続く

F文明二年興俊宛心敬奥書、「明応十年辛酉二月十七日」の記載

『愚句芝草』（中京大学本）

A序

B発句及び自注（「愚句芝草内発句」）計九十一句

C付句及び自注（計二百六十五句、百三十三の付合）

⑧202／203の後に「はてやまよはん雲にいる鳥／守（ママ）なれし人も稲葉をかりあけて」（中京大学本本文）が入り、204／205となる

⑨252／253の後に「246うつゝとも夢ともしらす立別／247袖になかけそ大淀のなみ」が入り、254／255に続く

⑰248「いてゝ川辺にはらへする人」の付句249がない

⑩310／311の後に「あらましにむねのとを山おもひやり／雪野ゝをしかあすやからまし」（中京大学本本文）が入り、312／313と続く

E 跋

F 文明二年興俊宛心敬奥書、昭和十七年八月の穎原退蔵氏識語

『志波久佐』（書陵部本）

冒頭に芝草（歌集）に関する明応十年写本と同一の文言あり

A 序

B 発句（「愚句芝草内発句」）計九十一句

⑬配列が45、47、46、48、49、50となる

⑱78句を77句の後にイ本より行間に挿入するゆえに、配列が75、77、78、76、79、80、81となる

⑮配列が87、89、88、90となる

C 付句（計二百六十句、百三十の付合）

⑲108／109、110／111、112／113を一本より記入（貼紙の形で挿入）

⑧202／203の次に「はてはまよはん雲に入鳥／聞なれし人も稲葉を刈あけて」（書陵部本本文）が入り、204／205に続く

（有本より書き入れ、貼紙の形で挿入）

⑨252／253の後に「246うつゝとも夢ともしらす立別／247袖になかけそ大淀のなみ」が入り、254／255に続く

⑩310／311の後に「有増に胸（のイ）遠山おもひやり／雪野の男鹿明日やからまし」（書陵部本本文）が入り、312／313と続く

G 「右本有心敬書集也殊ぬれ衣のの（ママ）理にて書とゝむる事正法にも叶哉又夢の浮橋なとかけるも同前に歟」（一本奥書）

本能寺本をもとにして、それぞれの伝本の特徴を見る。

文明十一年写本（以下文明本と称する）、明応十年写本（以下明応本と称する）では、文明本には、発句の配列の乱れが二箇所（③④）、明応本には、発句の配列の乱れが三箇所（⑬⑭⑮）ある。文明本には、付句に二つの付合が増補され（⑧⑩）、二箇所に配列の乱れがある（⑦⑨）。明応本は一つの付合が増補され（⑩）、一箇所に配列の乱れがあり（⑨）、三つの付合が欠落している（⑯）。

中京大学本は、江戸後期の書写と思われる仮綴本であり、[3] 巻末に穎原退蔵氏の「此之書は心敬か連歌の発句並に附合／を注したるものにして芝草之名にて伝は／れり京都本能寺に蔵する一本は室町／期の古写本にて最も信憑すへきもの／なるが此之阿刀本の伝本また善本たる／を失はず」という識語が書きこまれている（昭和十七年八月）。

また京大穎原文庫には、昭和十二年八月三十一日に穎原退蔵氏の父謙三氏が写した『芝草 全』（穎原文庫・GB・31）がある。この本は、文明本を写した新写本であり、[4] 遊紙部分には、阿刀弘文氏蔵写本を校合したとの退蔵氏の書き入れがある。阿刀家は、東寺の執行職を世襲する家であり、阿刀弘文氏は第四十一代にあたる方であった。京大本の異本注記は中京大学本の本文とも一致し、中京大学本は表紙に打ち付け書で「愚句　心敬」と記すが、退蔵氏も、阿刀弘文氏本について「表紙ニ　愚句　心敬　トアリ」と、記している。[5] 推測であるが、阿刀弘文氏所蔵の本を、昭和十七年八月までに、穎原氏が所蔵されるようになったのではないか。中京大学は、当該本を平成四年に購入している。

中京大学本の構成を見ると、発句は本能寺本と同数で配列も変わらず、また、跋文を持つ点も本能寺本に近い。ただ、付句では、文明本と同じ二つの付合の増補（⑧⑩）と、一箇所の付句の配列の乱れ（⑨）を持つ。しかし、穎原文庫本との校合が示すように文明本との相違は存する。なお、本能寺本跋文は、その末尾に「此二冊かしこき人の前にははちかはしくかたはらいたきことのみ也」と二冊本であることを示しているが、中京大学本も同様である。文明本、明応本いずれとも相違し、二冊本の形態から和歌を除き、序、連歌の句と和歌、跋を備えた形で書写した伝本であるといえよう。

書陵部本は、江戸中期の書写[6]で、冒頭には、明応本とほぼ同文の和歌の部に関する覚書がある[7]。和歌の部に関する文言があることも、発句の配列の乱れに関しても、明応本の系統をひく（⑬⑮⑱）が、明応本で欠けている句を他本との校合で補い（⑱⑲）、明応本が増補していない付合も、他本により書き入れる（⑧）点、校合による混態本となっている。

このように見てくると、『芝草句内岩橋上』に関してはまず、文明本、明応本とあわせ、中京大学本との校異を検討しながら、本能寺本の読解をすすめていくことが求められよう。

三

次に、他の伝本とはやや違った形式を持つ、大阪天満宮蔵『連歌芝草 完』（れ11・9）、『芝草抄 増補』（れ11・13）を検討する。以下、天満宮文庫目録での名称『連歌芝草』、『芝草抄』を使用する。

『連歌芝草』は、岩橋序文、発句、付句を内容として持つ集であり、その発句までの部分は前章と同様に検討すれば、次のようになる。

A序（末尾に「一見候則可被成煙ものなり」（朱にてこの部分をさし「已下イ本ニナシ」との書き入れがある[8]））

B発句及び自注（「愚句芝草内　発句」）　計九十句

⑳20句「ちる花にあすはうらみん風もなし」がない

㉑69句「秋は今するゑつむ色のした葉かな」がない（68句の後に、69句、自注共に朱でイ本より行間に補いあり）

㉒78句「秋の葉は雪気の雲を名こりかな」を末尾に句のみ補う

⑬配列が45、47、46、48、49、50となる

㉓配列が75、77、76、79、80、81（発句全体の末尾に78句）となる

⑮配列が87、89、88、90となる

H付句及び自注（算用数字で句番号を付す）

a「萱句抜書」…『連歌百句付』所収句（付注）1～4　付合数二（付合の順序は1、2番目である）

b「芝草抄」…『連歌百句付』所収句（付注）5～194　付合数九十五

（付合の順序は4、6、3、7～16、18～29、31～84、100、85、86、99、87、88、89～95、96、98、97番目となる）（5、17、30番目の付合が欠けている）

出典不明句（付注）付合数十七（197／198、203～208、211～236）

芝草句内岩橋付句（付注）付合数百五

（順序306／307、250／251（重出）、246／247、132／133（『芝草抄』と重複）、144／145～216／217、220／221～244／245、248／249～304／305、308／309～352／353）（180／181、218／219の二付合欠）

I「芝草集」「天文四稔未霜月吉晨書之」奥書左注（朱）「文明七年心敬遷化ナレハ天文ノ奥書ハ他人也伊氏ノ奥書書写誤而前後セル歟」

すなわち、『連歌芝草』は、発句では明応本からの句の欠損、句の配列の乱れをひきずっている。78句は⑫のように明応本の段階で無い句であり、⑬⑮の配列の乱れはそのまま引き継ぎ、㉓は⑭に起因する。㉒ではイ本から78句を挿入している形となっているが、それがなければ㉒は⑫になり、㉓も⑭とみなせるのである。

しかし、この集は、付句に関しては、前章までで検討した句集とは違う。すべて注を付した付合が入っているが、まず「萱草抜書」と題して『連歌百句付』の一、二番目の付合、「芝草抄」と題して、『連歌百句付』の三から百番目までの付合が入る（『連歌百句付』は、『心敬作品集』（昭和五三・角川書店）所収天理図書館本を付合の順に一から百まで番号を付す）。ただし、五、十七、三十番目の三つの付合がない。また、『連歌百句付』には、付注本である、『心敬連

歌自註』（彰考館文庫本）があるが、句と注の欠落があり、本書の注でそれらを補うことができる。例えば、『心敬連歌自註』では欠落している、『連歌百句付』の四十五番目の注、四十六、四十七番目の付合と注、四十八番目の付合の前句を補うことができるし、同様に七十七番から七十八番の句と注、七十九番の注、八十番から八十八番の句と注、九十九番、百番の注をも補うことができる（『心敬連歌自註』には、『連歌百句付』の七十九、九十九、百番目の付合の句はあるが注がない）。すなわち十七の注を補うことができるわけである。なお、『心敬連歌自註』に存する『連歌百句付』の注部分と比較した時、例えば本歌の存する三十四番注、三十六番注で歌の引き方に相違する部分が存すること、三十七番注が全く相違することなどから、『連歌芝草』と『心敬連歌自註』とは別系統の伝本と思われる。

さらに続いて、出典不明の十七の付合と、『芝草句内岩橋上』の付句とその注が入る。当該写本の付句の後半部分を構成する『芝草句内岩橋上』の内容は、144／145の付合以降、ほぼ順を追って最後の付合まで続くが、うち180／181、218／219の付合がない。詳細な検討は後日を期すが、『連歌芝草』が、岩橋序と発句を持つのに加え、『連歌百句付』の九十七の付合に関して注を持ち、また『芝草句内岩橋上』の付句の内容のうち、百以上の付合及び注を連続して持つ点は貴重であり注意されてよいと思われる。

さて、この句集は、縦14.8cm、横24.2cmの袋綴じ横本である。表紙に打ち付け書で、「連歌芝草　完」と墨書、朱筆で横に「津」。茶の斜め格子柄で、表紙や内部に虫食いがやや入っている。遊紙一枚があり、裏に

「水戸黄門公作扶桑拾葉集異本心敬僧都
芝草ノ序ヲ出セリ彼本ニ同作ニテ
芝草ト云モノアリ」

と書かれている。

本文は墨付七十九丁で、裏表紙には、

「本文次郎小年之時書写畢今度以

中瀬常住所持之本令校合有相違仍之
別ニ一冊写添者也

本　発句員　九十句
萱草抜書附句二句
芝草抄附句百十八句

中瀬本ヨリ拾出ス所
発句　一句　朱ニテ記ス秋ハ今末つむ花の下葉かな
附句　三十八句
奥書　一條

右増補一巻別ニ添　　長松　」

と墨書する。これは大阪天満宮神主滋岡長松（宝暦七年（一七五七）～文政十三年（一八三〇））の手になるもので、長松は中瀬常住の本を一見する機会があり、所持の『連歌芝草』と、中瀬本と相違する箇所を見比べて、足りない句をあらたに写したとわかる。裏表紙で、「本」と記されるのが『連歌芝草』であり、「中瀬本ヨリ拾出ス所」と記される「増補一巻」が『芝草抄』である。

さらに、『芝草抄』を見る。表紙に打ち付け書で、「芝草抄　増補」と墨書した縦14.0cm、横23.0cmの、『連歌芝草』よりもやや小ぶりの袋綴じ横本である。一丁表より八丁表まで、本能寺本『芝草句内岩橋上』の92句から143句までの二十六の付合が記されている。付合を二十六組、岩橋の配列のままに並べ、最後に八丁裏から九丁表まで、岩橋に見られない付合二組と、岩橋の246／247、306／307の二組の付合を置く。朱の校合入。表紙裏に

「芝草之草本先達而一冊
有所持今度中瀬常住之
本を以欠句を補ものなり
并心敬奥書一条

文化十一年三月　長松」

と墨書され、こちらから、長松が文化十一年（一八一四）三月に中瀬本を写したものであることがわかる。さらに、九丁裏には、一行開けたのちに

右此本は心敬静書集也誠にぬれきぬ
のことはりにてかき留ること正法にも
かなひ候や又夢のうきはしなどかけるも
同前也

とあり、これは書陵部本『志波久佐』が一本の奥書として記すところとほぼ一致する。[9]

長松は、中瀬本によって、自らの『連歌芝草』に足りなかった発句一句と、付句三十二句（長松の記述、正しくは三十句）を得た。なお、三十句のうち、『芝草抄』の二十番目の付合は、『芝草句内岩橋上』の132／133句で『連歌芝草』にも入り、同様に『芝草抄』末尾の二つの付合は、『芝草句内岩橋上』の246／247の付合と、306／307の付合であり、こちらも『連歌芝草』に重複して入っている。欠けていた発句は本能寺本の69句「秋は今するゑつむ色のした葉かな」であり、これは文中に朱で「イニ入／秋はいま末つむはなの下葉かな　クレナ井トイヘル心ヲ末ツムニテ／フクマセ侍リ末ナレハ詞ノヱンニヨロシクヤ」と補入した。付句は『芝草抄』に記したが、これには『芝草句内岩橋上』の92／93から142／143までの付合が入っている。『連歌芝草』は、付句中に、「144あるしもしらぬ宿にこそすめ／145世中にむまれあへるはた

れならん」に始まり末尾までの『芝草句内岩橋上』の付句を持っているから、両者を合わせれば、欠句二句はあるが、『芝草句内岩橋上』の付句とその注が網羅できるのである。

なお、更に検討が必要であるが、一見したところ、『芝草抄』の句群は明応本からは遠く、本能寺本に近い注本文を持っている。しかし『連歌芝草』の本文は、岩橋と同一句の場合、朱の異本注記で記された本文の方が『芝草句内岩橋上』（本能寺本）の付合本文と一致する場合が散見され（中瀬本を写した際の注記か）、岩橋の205／206の付合の前句付句が入れ替わる、236／237と238／239の順序が入れ替わるなど独自の本文も見られる。

加えて、『連歌芝草』には、朱が多く入れられているが、一般的な字句の写し違いの訂正や、校合した書き入れを示すのみならず、若書きの書写だからであろう、漢字の字形の訂正が朱でなされている場合が多くある。例えば三十丁裏の第71句「別」の字は明らかに訂正で正しく直されているし、注の中の「二条后」の「后」も誤っているのを直されている。また、三十一丁表の第75句の「歟」を「可」と直されているように、使うべきでないくずし字は朱の訂正が入れられ、右傍に自然な文字を示し直されている。読みにくく書きくずされた字は朱の小字で傍に示され、送り仮名の誤りにも訂正の印が朱でついており、少年の清書が大人の手によって添削されているとみてよい。さらに、後半にいくほど、字は乱れ読みにくく朱の訂正も多くなる。『連歌芝草』は、書写の稽古の際に写された伝本であり、未熟な筆の訂正添削も見られる伝本であった。

四

長松は、『芝草抄』において、増補した芝草の付句の後に、そのまま『ひとりごと』を切れ目なく記していったため、『芝草抄』は、『ひとりごと』の諸本の一本として調査され、はやく島津忠夫氏、木藤才蔵氏がその性質を述べられた[10]。しかし、それらは論の性質上、『連歌芝草』・『芝草抄』に焦点をしぼった論ではなかった。だがこれら二本は、

散逸しその実態がわからないとされてきた心敬の句集の後世の伝来の一つの形態である。応仁二年に救済・周阿と同じ前句に試みた百の付句とその自注、文明二年に兼載の為に芝草から示した発句と付句それぞれの自注の集成、すなわち東国滞在の前半における心敬の著作が江戸後期に流布していたことがわかる。句に自注が克明に付されており、『静書集』という名称も奥書で使われ、検討すべき点を多く有しているが、『連歌芝草』は、『芝草抄』と合わせ『芝草句内岩橋上』の一伝本であるのみならず、その一部をとりあげれば『心敬連歌自註』よりも句注の数が備わった『連歌百句付』の付注伝本でもあった。

ここでは、『芝草句内岩橋上』の伝本を概観し、大阪天満宮蔵二本の関係を把握した。研究を進めていくためにも有益と思われるので、まず『芝草抄』を翻刻紹介しておくことにする。

※貴重な伝本の閲覧、調査をお許しくださった中京大学図書館ならびに、貴重な伝本の閲覧、調査のみならず、翻刻もお許しくださった大阪天満宮文庫にお礼を申し上げる。

注

（1）引用は『連歌貴重文献集成第五集』による。

（2）引用は『心敬集　論集』（昭和二一・吉昌社）による。

（3）中京大学図書館請求番号（911.2／Sh64）、また『中京大学図書館蔵国書善本解題』（平成七・中京大学図書館）も参照した。

（4）潁原文庫本は本論で示した文明本の特徴を全て持ち、『潁原文庫目録』にも「文明十一年写本」と注する。

（5）引用は、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。

（6）引用は、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。また『図書寮典籍解題　続文学篇』（昭和二五・養徳社）を参照した。

（7）書陵部本には以下のように記されている。

外題

心敬詠歌八冊芝草抜書

本之端書に

芝草之内愚詠下　前後不同

哥数百七拾七首　自注有

巻頭

山霞

朝霞色こき方をしるへにて

隔てし山も見えぬ春かな

此哥心見えぬと侍るは見ゆる也

かすみの深きを山そとしれは

隔ゝるかひは見えぬと也

巻軸

冬尺教

うつしける木葉も朽て霜をへぬ

跡無法のするの山風

釈尊一代説相を入滅ののち

阿難尊者結集し給て陀羅

葉に書集てひろめ給しも今は

末法濁乱の時なれは朽うせ

侍しと也

巻中之哥皆此躰也畧之招

月庵清厳和尚正徹の門弟

と見えたり注の詞に畧其
躰有也

（8）序文末尾の文言「一見候即可被成煙ものなり」は、本能寺本、文明本、中京大学本序にはなく、書陵部本序には「一見候則可成煙也」とある。

（9）書陵部本には以下のようにある。

一本奥書
右本は心敬書集也殊ぬれ衣（ママ）のの理
にて書とゝむる事正法にも叶哉又
夢の浮橋なとかけるも同前候歟

（10）島津忠夫「「心敬僧都比登理言」おぼえがき」（『愛知県立大学説林』19・昭和四五・一二）、木藤才蔵『心敬連歌論集』（昭和五六・笠間書院）解題（「ひとりごと」と「老のくりごと」の諸本）、『中世の文学　連歌論集（三）』（昭和六〇・三弥井書店）。

『芝草抄』翻刻

凡例

一、翻刻に際しては可能なかぎり原本のままとしたが、付合に限りゴシック体で示した。
一、各句には、『連歌大観一』の本能寺本の句番号がある場合は、その句番号を記し、丁移りも示した。残りはいくつ目の付合になるかを前句頭の数字で示した。
一、九丁裏からは、奥書につづいて『ひとりごと』本文になるが、それは省略した。
一、各丁において、朱書の箇所は次の通りである。

一丁表　十一行目へ
二丁表　三行目右傍小字「満誓歟」左傍○
五丁裏　二行目右傍小字「わたるかとなり歟」左傍○
　　五行目頭注「別本ニ出たり」
六丁表　六行目二文字目と三文字目の間の補入文字「と」
六丁裏　九行目頭注「別本に出たり」
七丁裏　四行目十五文字目朱にて「れ」と書き直し
　　五行目右傍小字「無侍歟」左傍○
　　十行目右傍小字「置歟」
八丁表　一行目右傍小字「主歟」「無歟」
　　六行目五文字目の抹消筆　右傍小字「と歟」左傍○
八丁裏　四行目右傍小字「ひ歟」「ら」
九丁表　三行目前句のへ
　　四行目頭注「付句也」
　　五行目右傍文字「物語」
　　十行目頭注「別本ニ出たり」「○」
　　十一行目右傍文字「子」

付句

92　はしるきゝすも鷹に遁れす

93あしをいたむ山路に花の散を見て

句の心は世中無常何の上にものかれ
えぬ方を申侍り身を捨て走る
雉子も命を失ひ足を休めてのとやかに
みる花も跡なく散うせ侍は走るも居
たるも遁れぬかたの恐しきを句に対し
侍る見てといへるは観したる心にて
荘子昨日山中半の句を思ひ合せ侍るなるへし

94　〻おほつかな秋もやふかく成ぬらむ

95こゝろほそしな花落るころ

此句は春なから花の落はてゝ侍る
ころは心ほそく心にあちきなくはへれは
さて秋にかへるかとなり

96　心ひとつはのとけくやなき

97あさほらけ霞に浮ふあま小舟

あけほのゝ打かすみたる海士の舟を
なかむれはかはかりのとやかにゑんに面
白き比も棹を取海士の心はさはかしく
あらけなくニそ侍らめかとなり

98　くるゝまてには身をも頼ます

」一オ

99朝ほらけ舟ゆく跡の浪を見て

此句あらき浪に合て只漕もうせんニハ

ゆめ〳〵あらすひとへにゑんなる朝

明にさす舟のあとなき波を見て世中の

風波を思合たるなるへし沙弥救済（満誓歟）か

歌の俤こゝろを盗み侍る成へし

よの中は何にたとへむあさほらけ

100　君かあふきそ置しまゝなる

101しつみても朽すやなきかからとまり

さ衣の女房のむしあけのから泊と云

ところにて沈み失はへる時扇を都に

かたみにとてをくり侍こと共にて前

句をきしまゝといへは亡かからは此世ニ

とまれるかとなり

」一ウ

102　またよとたにもいはぬ朝戸出

103旅寝せし我にさきたつ舟を見て

句の心は出ぬる舟に乗をくれ侍る時は

宿のあるしなとにも暇をこひはへらん

心をも忘れあは〳〵敷さまにて今度（本ノマヽ）

よくなれ侍り

」二オ

104 **井手のやまふき匂ひぬるころ**

105 **ちりしける花ハもろへ(え)の名残にて**

橘の諸兄大臣井手寺を立て款冬
好て色〳〵つくして植玉ひし跡
なれはなりされは井手の大臣とも云
ちりしける山吹ハもろえのかたみといへり」二ウ

106 **もとのさとりを心にはえす**

107 **いろにそむ花を一ふさわか折て**

大覚世尊涅(子)槃に入給へるきはに大
事の因(囲)縁(原本如此)をさとりえたる心を顕さん
とて一ふさの花をおりてあけ給迦葉
破韻微笑し侍るに我ハ迷の色に
そみて折ことの拙きに思ひ合侍り

108 **はなは底なる池のはちすは**

109 **春ふかきさやまの桜色くちて**

はるの暮かたのさくらの花は水底に
散しきて朽はて侍るに蓮葉は
漸青やかに出たる成へし前の
はちす葉の花をさくらの花にとり
なし侍るはかりなり」三オ

110　**植をきし草はこの頃花さきて**

111 **人のかたみのさくらちるかけ**

うへをきし草も桜もなきあとの形見
にてかたみのさくらのちれる陰の草には
おもはぬ花のさけるといへる句の中ニ
あはれすこし侍るへきにやめをとち
むねをしつめて理をはなれて見
侍る作者はかりの上なるへし

112　**なかめすてけり春秋のあと**

113 **こゝろさそかたみの草に残るらむ**

なき人の春秋の哀をかけて植をき
ける草ともを見て詠めすてゝ消
侍る心はさこそ執心とまり侍るらんとなり
かやうの前句に花よ紅葉よなと
いへは面白かり侍れは耳にも入へからす

114　**なみたこそ覚えす袖にこほれけれ**

115 **はなをも身をもわすれぬる陰**

心すまして長くはなを思ひ入侍る
ほとに後には身をも花をも茫（本ノマヽ）に
とし只感涙のおほえすもろく落侍る

」三ウ

となり等閑ならす花をおもひ入たる
さまなり

」四オ

116　**あけすはいそくかけを見ましや**

117 **すたれまく霞の窓のゆふ月夜**

ろう〳〵と打曇りたる夕陽に
簾を捲ておもはすに急き出ける
夕月夜の仄なるをまうけてさても
このすたれをあけはへらすはうたて
しきことなるへしとおもへるなり霞
のまとなといへるあたりいさゝかふひ
むなるへくや

118　**なきかあと花に三年のかけもうし**

119 **にゐまくらかの霞むあさ床**

三年新枕するといへる古歌侍る也
なきか跡は人の帰し朝床なれは
よるへくやにほひなとにて花をハ申也

」四ウ

120　**春をいそくもたゝ花のため**

121 **あき遠きうら若草の野辺を見て**

前句の春を急くとハ春になれ
かしといへるを引替ていかにもいそ

きすきよかし若くさの秋の花を見
侍らんにとよせ侍る前句をひきかへて
あらぬかたへ付はへる一の粉骨也

122 **をのつからおれふし柳橋にして**

123 **わたるやぬれぬ水の春かせ**

春風の水上を渡れと濡ぬハ
この折伏たる柳をわか橋になして也
後かとにて人のわたると見給はゝ無
下の事にや

」五オ

124 **梅かゝやそのよの袖に残るらむ**

125 **あけぼのしたふうくひすの声**（別本に出たり）

朝朗の鶯のこゑをしたふにはゆめ〳〵
侍らす鶯の夜深くしたひ来侍ては
我なれ侍し梅の匂ひやかた敷の
袖に残りはへるそれを花の香に
たかへて鶯の尋はへるかとなり

126 **きゝそつたふる神のそのかみ**

127 **ほとゝきすほのかたらひし山にねて**

ひとへに式子内親王の斎院の時の
御ありさまともの哥ともを立入侍り

」五ウ

ほとゝきすそのかみ山の旅まくらほのかたらひし空そわすれぬ

128　**そことなにはの夕暮のそら**

129 **ほゝきすあしのしのひに鳴すてゝ**

そことなきゆふくれの空と侍れは郭公の声の面影うかひ侍はあしの忍ひはしのひねまてにて芦ハ中の枕詞なり半臂の句とて歌には専中にやすめたる字を置はへり連歌にも大切の事也」六オ

130　**深山の道をひとり社ゆけ**

131 **見しはなき蓬の杣の露分て**

此句よりさま山類なとにみ給はゝ無下の事也なきか跡のふりはてゝよもきのみ高き露をなく〳〵独たつね入はへる心ほそさ只深山に分まよひはへる心地しぬるとなり

132　**あらましにつゐの栖を〆をきて**

133 別本に出たり **よもきかもとよいつの夕暮**

此露の身のはてよもきかもとを栖とし

て朽うせ侍むあらましことを歎き扨もいつの夕暮かなとおもへる成へし

しめをきていまハとおもふ秋やまのよもきかもとにまつむしのなく俊

成よもきふにいつかをくへき露の身はけふのゆふ暮あすの明ほの慈鎮

134　くさのみ茂し古へのあと

135なくむしもしらす見ぬ世の誰ならん

なきあとの形見のくさに恨ぬる虫の声をきゝてさてもこゝに心をとめ侍しいかなる人か生かはりてはかなき虫なとにも成てすたき侍るらむとすゝろことをあはれにたへておもひあはせ侍る心なり

」六ウ

136　浅ちかはらの人の面影

137露はたゝ夕の落す泪にて

浅茅か原に夕の露のこほれ侍るハさなから涙かとあやまたれはへれハ人の俤のみなれ侍歟はさては此涙は夕のおとすよと理侍る也此句少

」七オ

前句の心はへなとより侍るなり

138　寝覚そわれもなき心持する

139まほろしのおもへはおとす涙にて

はかなき暁此身を思ひ起侍れハ（匠歟）

さらに我とおもへる物もなくはんへれは

こほるゝなみたもまほろしのみ

ぬし（主歟）にてわれハおとさすとはかりきゝ（え歟）

入はへるとなり　」七ウ

140　いかなる夢の我をとふらむ

141こしかたも行衛もしらぬ身を受て

無来無去の身のさてもいかなる

夢かわれとなり侍るらんとなりとふに（と歟）は

玉しゐの身をかりたる成へし

142　つらきかたにそ生　かはれる

143罪あるは女の身をやうけつらん

前句の方といへる心は遠きさかひの

ことなるを女と男の中のこゝろを

かたと取なし侍る斗此句の眼なるへくや　」八オ

27　いな葉の風の音そ閑けき

ふるあめのあしの丸屋八戸をとちて

を田もる庵なとをは芦の丸屋と
いふ(ひ歟)ならはしはへれハ也雨のあしと
つゝけたるはかりなり経信夕さ
りハ門田のいなはをとつれて
あしの丸やに秋風そふく

28　はてやまよはん雲に入鳥
もりなれし人もいなはを刈あけて

此前句の心ハひとへに鳥の雲に入と
いへるを引替て雲よりおり
なれて稲葉の雲にはみ入なれ
ぬるにかりあけはてなは鳥おり
なれしところに迷ひはへらんと也

246　へうつゝとも夢ともしらす立わかれ
247(付句也)**袖になかけそ大よとのなみ**

伊勢斎宮(物語)事也女に又もあはすて
鄙の国へ行とての歌のこゝろ
大よとのまつはつらくもあらなくに
うらみてのみそかへるなみかな

306　いしにへの里にかへれは人もなし
307(○別本ニ出たり)**ひとり音する水の江のなみ**

これは浦島かこ子の五百年に至り
侍りて我里に帰ぬれはたゝ江の
水のはう〳〵とむかしをひとり
こたへはへるさまなり

」九オ

右此本ハ心敬静書集也殊にぬれきぬ
のことはりにてかき留ること正法にも
かなひしや又夢のうきはしなとかけるも
同前哉　（以下略）